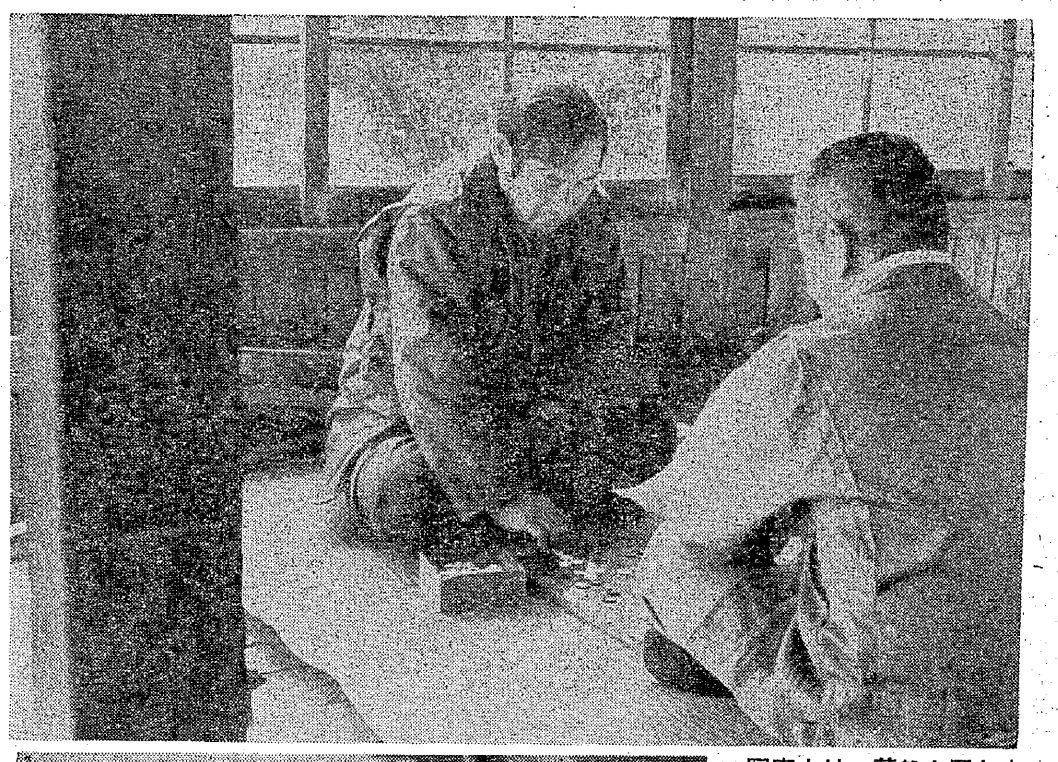
原告団

遺族・CO裁判、災害責任追及、特集号

第百七十一号

原告団レポート

CO患者――
吉田 義彦さん



写真上は、碁盤を囲む吉田さん（真向うの人）。下は、屋内体育館でバドミントンなどで汗を流し機能回復訓練にけんめいのCO患者たち。

三池闘争のときの頼もしい吉田さんの姿

今樂しみは休日の湯治

転院、また転院の残酷なその足跡

心暖い妻の願いよ、実れ

取材の日

CO患者＝吉田義彦さん。五十二歳。組合が団結の力で、CO中毒患者仲間のために闘いとった、いわゆる造成職場の一つ――万田作業所で、もっぱら農園作業に従事している。

先ごろ、この欄のための取材にたずねたとき、彼はちょうど同じ患者仲間の一人を相手に碁盤を囲んでいるところだった。

午後であったが、その日は、ここで働いているCO患者たち全員体育リハビリテーションの日だとのことで、下の屋内体育館（以前武徳殿だったのを、あの大災害後にわかに、CO患者たちの機能回復訓練場に変えた）で、思い思いに、バドミントンや卓球で汗を流しているところだとのことだった。足を踏みいれた屋内作業場がからんとしているはずで、吉田さんがその患者仲間と囲碁に興じているところは、その作業場の南の片隅だった。

興ずる囲碁

そのうちに、二人はごそごそと碁石を片づけ始めた。勝負が決したのだろう。

「どっちの勝ち？」――声をかけると、はじめて顔をあげた彼はただにやり笑うと、再び黙々と碁石を片づけるのだった。どっちの方の勝ちか、もうはっきりしていた。

うん、吉田さんは今気分がよさそうだな。よし、この囲碁を楽しむところをカメラにおさめてやろう。でも、はたして反応がどう出てくるか。相手がCO患者となると、取材もほとんどこっちの思い通りにはいかないのが常。だが、ここは決断。ということで切り出して見た。

「そうだ、吉田さんを取材にきたのだから、ひとつ、囲碁をやっているところを写そうか」

「囲碁ばしよるところば、写真にとるげなたい。もういっぺん、碁石ば並べんなんたい」、相手の仲間がのってきてくれたのがよかった。彼はにやにや笑いながらも一度は碁笥に返した黒の碁石を再びつまみあげた。

「待ちなはり」と相手の仲間。そして、自分がそれまで持っていた白の石を吉田さんの方に押しやりながら、昂然と胸をはっていった――「ホラ、写真にとるげなだから、あんたが白を持たんなんたい」。

哀れなこと

そこへ、屋内体育館の方から四五人のCO患者仲間が帰ってき、午後の日差しで幾らか暖かそうな雰囲気をかもし出している、この南側の一隅にたむろした。

「わアー、凄かつのあるなア」――そこにころがっていた、三分通りボロボロになったエロ週刊雑誌をとりあげたかと思うと、なかの一人が声をあげる。

こっちも早くから気づいていたもので、なるほど一番上のページの、あやしくくねった女の裸の写真をひと目見ただけで、それがどれほど凄いものであるかということは察しがついていたが……。

大なり小なり、CO患者たちがあの性機能に恐るべき障害をうけ決して少くない者が、それを完全に破壊されてしまっている例のあることは遠に知っている。ほかのあれこれの事情がそれに重なってそんなCO患者の妻で、ついに蒸発してしまった家庭もある。

そこで、いって見た――「そんな週刊誌を見て、はたして感激できるかな？」。

どっと湧きあがったこう笑。そのなかで一人がいった――「たとえこんかつば見たところで、俺たちのものはビクッともせん。哀れなりけり」。

するとほかの人がいった、「たアだ、目の保養、目の保養」。それは明らかに自嘲だったが、そこに彼らが心の底にもつ、残酷な、ひとつの悲劇をかいま見たものである。

家族と症状

さいわい吉田さんの囲碁を楽しむところを、写真におさめることに成功した。

そこで、取材にはいる。

もっとも、なるべく取材をスムーズに運ぶために、事前に、CO患者の彼についてつぎのようなことを調べておいた。

生年月日　昭和三年四月十二日
職　種　（もちろん被災前のもので）仕繰工。
入　社　昭和二十三年四月五日。（二十歳）
住　所　荒尾市緑ケ丘社宅楓町三十六棟
障害等級　十二級
家　族
妻　芳子さん（47歳。昭和八年一月五日生まれ。結婚は昭和二十四年十二月）
長女　八重子さん（30歳。昭和二十五年七月七日生まれ）。
長男　順次さん（27歳。昭和二十八年一月三十日生まれ。現在広島）

これらの家族関係のほかに、彼の被災と症状についても、昭和四十一年に作成されたカルテを通して次のようなことを理解しておいた。

被災箇所　三川鉱坑内二十一卸
被災年齢　三十五歳。（注＝結婚後十四年目だったのだ）
坑内脱出　倒れた者を護送して宮浦鉱の坑口からあがる。
在坑時間　九時間。（注＝その間、自発的に倒れた仲間の救助活動を行なっていたか？）
罹災時自覚症状　頭痛、耳鳴、吐気。
自覚症状　不眠。
精神症状　高度の情意鈍麻、高度の幻覚妄想。
神経症状　腱反射消失、筋強剛

激しい症状

彼はもともと頑健な体躯、優れた頭脳を恵まれた人でもあって、はじめはこれという症状もなく、病院の門をくぐったのは大災害から早や三週間もたった、その年十一月二十九日のことだった。

それがひきガネだった。彼のCO中毒症は急激に増幅していき、以後は次のように病院から病院をわたり歩く人間に転落。

その年十一月二十九日から、三井病院の万田分院に通院。あと大牟田労災病院に転じ入院（昭和三十九年八月三日）すると、以後は三池保養院―大牟田労災病院―退院―不知火保養院―亜沢病院と、転院また転院。やっと退院して万田作業所に仲間入りできたのは、なんと昨年の暮れのこと。そこには明らかに、彼を盲かしているCO中毒症が特徴としてもつ振幅の激しさがありありとのぞかれ、あとあとへの影響を思えば、彼の取材には十分心すべきことを初めから心得てはいたが……。

一問一答

以下はこの日彼との問答――

「長女の八重子さんは働いているそうだけど、どこで？」

「あら。大牟田のどこじゃったかナ？　忘れた。ハハハハ……」

「長男の順次さんは？」

「広島。何か、会社で製図ばやっとるとでしょう。アパートば借りて住んどるですよ」

「あれエ。遠いところの子どものことを知っていて、足もとにいる子どものことは知らんと？」

「アッハッハッハ……」

「じゃ、奥さんと結婚したのはいつじゃったですか」

「さア……」（ただ笑いながら首をかしげるばかり。そのうち続けて）「試験されよるごたるが、とにかく記憶の方がサッパリ。昨日だったか家内から頼まれて、ホトケさん花ば買いにいって、生け花用の花ば買うて帰って怒られたばかりで……。アッハッハッハ……」

側に、エロ週刊雑誌のページをめくりなどしながらたむろしていた仲間の間から――「わしどもは、あの方も記憶力も、何もかもダメダメ」。そしてまたくり返した――「哀れなりけり、哀れなりけり」。

気がつくといつの間にか、窓から差しこんでいた秋の日差しがかげり始めていた。

聞いたこと

あとでそれとなく、彼について妻の芳子さんに聞いたこと。

戦中戦後にわたるすさまじいあの恐慌の嵐のなかで、なおかつ彼はちゃんと八女工業学校に進学、機械科で学んだほどの人間だった。それが今まわりの人びとの前にさらしている「高度の情意鈍麻」（カルテによる）と評される人間像のなかにはその片りんもうかがうことはできず、悲しい。

妻の芳子さんは、こんな傷だらけの彼の命を、町の一企業に働きながらささえてきたのだが、こども語る――「長いこと苦しんできた主人です。このうえはただ、何でともなく定年まで会社に出てくれることさえできれば、あとは主人を大事にしていくばかり。もう申しあげることはございません。これだけが私の願いです」。

彼は今、休みの日となれば近くの玉名温泉へ湯治に出かける。心暖い、妻の配慮から出ていることは述べるまでもなかろう。